

はじめてのよさこい

渡邊 法美*

(受領日：2014年6月1日)

高知工科大学マネジメント学部
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: watanabe.tsunemi@kochi-tech.ac.jp

要約：2013年にはじめて土佐山田祭り和高知よさこい祭りに参加し、踊らせて頂いた。練習と本番の踊りを体験して、改めて、或いは初めて、気が付いたことが数多くあった。学生のみんが時間とお金をやりくりして懸命に生きていること、工科大生は本当に温かく優しい気持ちの持ち主であること、教職員も学生と大学の幸せを願って尽くしていること、土佐山田祭り・高知のよさこい祭りの魅力とは、地域・商店街と踊り子チームとの、熱く温かいキャッチボールにあること、等である。よさこい祭りもまた、工科大学の大切な理念の一つであると考えられる「世界一、人が育つ大学」の方針を具現化するひとつであると考えられる。

1. はじめに

MC：「おまえたち、明日も踊りたいかー!？」

踊り子：「オー！」

MC：「おまえたちに伝えたいことがある。」

踊り子：「...」

MC：「工科大チームは、今年、審査員特別賞を受賞した～！」

踊り子：「ウォー！やったー！」

MC：「お前たちの熱い踊りをはりまや橋商店街の人々に見せてくれ！」

踊り子：「オー！」

(MC：山沖君)

2013年第60回よさこい祭り本祭2日目の日曜日の夜、最後に踊らせて頂いた「はりまや橋商店街」での熱い一コマである。2013年のよさこい祭りは、工科大チームにとっても、そして私にとっても最高の夏になった。初めてのよさこいの感想を述べてみたい。

2. よさこい参加を決断するまで

高知に来て16年。音楽好きの私は、高知最大のイベントの一つであるよさこい祭りにも、勿論興味があった。開学10周年の2006年の夏に、「歌って走ってキャラバンキャラバン」の予選会が工科大

で開催された時は、物部川のアユを思いながら「ただアユたくて♪」(原曲は、EXILEの「ただ逢いたくて」)を歌ったこともある。いつかは踊りにも、ミュージカルにも挑戦したい!そんな気持ちをずっと抱いてきた。

しかし、よさこい参加の壁を超えることは、なかなか出来なかった。理由は二つあった。第一に、最も暑い時期に開催されるよさこい祭りは、北海道出身の私にとってとても厳しいものになると思ったからである。第二に、工科大よさこい踊り子隊で踊るためには、約1か月のハードな練習を積み必要がある。果たして、50歳を過ぎ、数年前にアキレス腱を切った自分の身体が持つのか、また、仕事との両立は可能なのか。悩みは尽きなかった。

2013年の4月、研究室の新メンバーとして、よさこい踊り子隊のリード兼企画を担当している玉井亮子さんが入ってきてくれた。彼女は、折に触れて、よさこい祭りがとても魅力的であること、さらに、60周年記念大会である2013年は、よさこい祭り全体にとっても、そして工科大にとっても特別なお祭りであることを熱く語ってくれた。さらに、彼女と他のリードメンバー、裏方のみんなが大学内で、よさこい踊り子隊への勧誘を熱心に行っている姿に打たれた。挑戦することに決めた。

3. やさしき若者

3.1 練習での風景

大きな不安の中で、初日の練習に向かった。果たして、私は最年長であった。工科大教職員も数えるほどしかいない。準備の柔軟体操では、身体が殆ど曲がらない。「ああ、やっぱり無理なのかな」との思いが一瞬頭をよぎった。とにかく続けようと思い、可能な限り練習場に足を運んだ。

たとえ下手でも練習に参加することはとても気持ち良かった。それは、工科大チームの若者全員が、こんなおじさんの私を温かく受け入れてくれたからであった。「おじさん、何でここに居るの?」といった冷ややかなまなざしを、誰一人から、そして一瞬たりとも感じたことはなかった。よさこい祭り本祭数日前の追い込みの時期に、高松出張から高速道路を飛ばして大学に戻り、終了10分前に練習に参加したことがあった。既に、最後の柔軟運動を行っているところだったが、その時も、温かいまなざしを通して、「熱い中、運転大変だったでしょう。ご苦労さま。良く間に合ったね。」というねぎらいのメッセージを感じた。無理して戻ってきて、本当に良かったと感じた。

ある踊り子仲間の男子学生から、「僕は笑顔要員です」との言葉を聞いたときは、何て上手い表現だろうと感心した。同時に、「そうか、僕も笑顔要員だ」とホッとした気分になった。彼からは、「先生の踊り、めっちゃキレていますね。」とのお褒めの言葉を頂いたこともある。踊り子ならば分かるであろう。「踊りがキレている」は、踊り子にとって極上の褒め言葉である。自分の踊りが下手くそであることは、頭では分かっていたが、この言葉にはエクスタシーを感じてしまった(笑)。「踊りがキレル笑顔要員」は、いつしか私の目標となっていった。

他にも、工科大生の温かさは枚挙にいとまがない。

別の女子学生の踊り子は、オープンキャンパスで来場者にアイスクリームをすくって渡す仕事をしていて。懸命にアイスクリームを渡し続けた結果、彼女の手の皮は大きく剥けてしまった。それは、見ていて痛々しいほどであった。エース級の彼女の役は、踊り子隊の先頭で提灯を持って踊る役である。提灯を大きく動かして、ダイナミックに踊る中で、痛みを感じないはずはなかったと思う。しかし、彼女は、練習の時、苦しい表情など微塵も見せず、いつも笑顔でさわやかに踊ってくれるのであった。

大人の私は、工科大の若者から多くを学んだ。彼女たちと彼らたちの温かさと優しさによって、よさこい練習の場は、私にとってのだいじな場所になっ



図1. 素晴らしき仲間たち (撮影: 前田智央氏)

ていった。

3.2 本番での風景

工科大生の温かさは、土佐山田祭りやよさこい祭りでも多くの人々を魅了した。土佐山田祭りで全チームのステージでの踊りが終わった後、会場に残っている者全員で土佐山田音頭を踊った。工科大チームは全員が踊りの輪に入って大きな掛け声をかけながら積極的に踊って、会場を大いに盛り上げた。

よさこい祭りでも、それは遺憾なく発揮された。上町商店街、追手筋、はりまや橋商店街等で自分たちの出番を待っている間、他の多くのチームが横を通っていく。その度に、「おつかれさま!」の言葉が交わされ、次にエールの交換、最後には、ポストレッドソックスの上原投手さながらの「ハイタッチ」の儀式が、我が隊の前方、真ん中、後方の至る所で行われるのである。もともと、よさこい祭りとは、そのような人々の温かい触れ合いに溢れるお祭りなのだと思う。その「正調よさこい」の精神を、わが工科大生はしっかりと受け継いでいる。大学で若者を預かる一人として、本当に教職員冥利に尽きる瞬間であった。

4. 優秀なリード

リードとは、踊りを指導してくれる学生の指導者群のことである。リードのみんなは、とても優秀な教師であった。まず、全員がとても高い技術を持っている。一つ一つの動きは、男性は鋭く力強く、女性は優雅でしなやかであった。どこまでも響き渡るさわやかな鳴子の音、それを生み出す鮮やかな手さばきは、本当に見事なものであった。

リードは全員が熱心で親切な良き先生であった。今回の踊りはA, B, C, Dの4つのパートから構成されており、例年と比べて、とても複雑な構成となっ

ていた。その複雑な踊りの全てのパートを、リード全員がどこからでも踊ることが出来る。反復練習、ワンポイント練習では、各リードが状況に応じて「Aパート行きます!」「Cパート行きます!」と、その場で踊りの見本を示してくれた。

リードのみんなは、いつも私の能力や事情を十分に考慮してくれ、辛抱強く、かつ、分かりやすく教えてくれた。私は、一番身体が固く、物覚えが悪く、踊りが下手なのである。丁寧な個人指導の後の「分かりましたか?」の質問には、「ハイ!」と出来るだけ元気よく答えることを心掛けた。しかし、「それでは今のところを一人で踊ってみて下さい。」と問われたとき、「??」と今教えてもらったばかりの踊りが、何も頭に浮かんでこない。そんなときも、「最初はみなそうですから」と気遣ってくれた。

また、「先生は堂々と間違っただけで、清々しさを感じます。」とのご指導には参った(笑)。生徒を傷つけず、しかし、一層の奮起を促している。名言であった。

リードの高い技術力に基づく、温かい熱心な指導によって、私は少しずつ踊ることが出来るようになっていった。

練習のプログラムは十分に練られており、とても感心した。通常の練習では、決して無理をさせず、十分な水分補給と休憩を確保し、踊り子の基礎体力を徐々に高めていった。同時に、リードの先生たちは「鬼」にもなった。初めて、「まわり踊り」を行ったときは驚愕した。体育館を反時計周りに休むことなく何クールも踊るのである。「ヤレヤレ、やっと終わったか」と思ったら、「ハイ、それでは筋トレ行きます!男性は腕立て20回、腹筋30回」との「地獄の特訓パート2」が待っていた。さらに、踊り子仲間の学生が、「先生、筋トレ出来たら、僕らも励みになります!」と追い打ちをかけてくる。正直、最初は、「君たち、俺、おじさんだよ。何歳だと思ってるの?」と涙が出そうになった。残念ながら、地獄の腕立て・腹筋は完璧にこなすことは出来なかったが、まわり踊りには歯を食いしばって耐えた。相撲の世界では、「限界まで頑張るのは『練習』。限界を超えたところまでいくのが『稽古』…」なのだそうである¹⁾。この時私は、確かに稽古を行っていた。

しかし、この特訓のおかげで、山田祭りも、よさこい祭りの本祭も、そして後夜祭も、一度もリタイアすることなく、なんと全行程の踊りをこなすことが出来たのである。みんなとともに、自分の限界の壁を打ち破り、本番で素晴らしい感動を味わわせ

てくれたリードのみんなには改めて感謝したい。

5. 献身的な裏方

裏方のみんなの働きは、大変献身的であった。正直に言って、彼女たち彼らたちを見ていると、仏さま神さまに見えてくる。

昨年の高知の夏は、四万十の江川崎で日本最高気温の40.9度を記録したとおり、本当に暑かった。特に、武道館や体育館など屋内での練習は暑かった。しかし、一番高い体感温度を感じていたのは、間違いなく裏方のみんなである。踊り子ほど汗をかかないからである。にもかかわらず、裏方のみんなは、踊り子の練習をずっと見守り、休憩時には、「おつかれさま〜」と笑顔でねぎらい、うちわで扇ぎ、ドリンクを配ってくれるのである。

次の作業は、究極の裏方作業といえると思う。

練習の際、踊り子が鳴子を落として、鳴子の歯が欠けることがある。下手くそな私は、手が滑って、良く鳴子を落とした。しかし、翌日の練習では、歯がきちんと揃っている鳴子を渡してくれるのである。私は、それを当たり前のことと思い、恥ずかしながら、特段の注意も払わなかった。

練習の無かった日、ある用事で体育館横の第二練習場に行ったとき、裏方のみんなが行っていた作業を見たときの感動を今も忘れることができない。なんとみんなは、気温35度を軽く超えている屋外で、鳴子の欠けた歯を一つ一つのりづけして、コンクリートの地面に天日干しにするという地味な修繕作業を行ってくれていたのである!そのことを、踊り子に言うことは決してなかった。もし私がそこに行かなければ、天日干しの修繕作業を永遠に知ることにはなかった。

音響担当の裏方であるPA同好会やDTM同好会のみんなも、数多くの練習に参加し、的確な曲出しで、踊り子を支援応援してくれた。ボーカル兼裏方のキャリア(藤本さん)の爽やかで伸びやかな歌声にも何度も救われた。

裏方のみんなは、「私たちは、あなた方を支えています。感謝して下さいね。」とは決して言わない。それどころか、「私たちはこういう作業をしています。」と言うことさえ、決してなかった。天日干しの修繕作業以外にも、私の知らないところで、多くの作業を行ってくれていたに違いない。まさに、「働き損」「尽くし損」である。

私も含めて、100人を超える大所帯が楽しく何不自由なく踊ることが出来るのは、裏方のみんなのおかげである。そして、そのことを我が工科大チーム

の踊り子も共有している。

吉岡千晶代表が率いるこのような素晴らしいチームの一員として踊ることができる幸せに感謝せずにはいられなかった。

6. 素晴らしき哲学・振り付け・音楽

今回のテーマは、工科大生の象徴である flying fish、「とぶうお」であった。

「みんなと楽しく泳いでいる中、大きな嵐がやってきて、みんなバラバラになってしまう。その中で、仲間を一人また一人と探し、最後は全員が集まって、空から差し込んでくる希望の光に向かって空を飛ぶ」というストーリーである。

「この飛ぶ魚たちは、勿論、私たち工科大生自身だけでも、よさこい祭りを支える地元の人々、さらには東日本大震災で被災された人々、今世界中で苦しんでいる全ての人々も指すのかい？」と企画の玉井さんに聞いた。すると彼女から、「先生、良く分かりましたね～！」という返答が返ってきた。

さらに、踊りの一つ一つの動きの中に、思いと祈りが込められており、それを表現していることも聴かせてもらった。

工科大の若者たちが、こんなにも広く世界をとらえ、こんなにも深く人々のことを愛していることを知って、とても感激した。この哲学とも言うべき広い世界観と深い愛が、工藤先生と織田哲郎さんの素晴らしい振付と音楽によって表現され、関係者全員が一体となって、工科大のよさこいが創られている。

工藤先生からは表情豊かに踊ることの大切さを教えて頂いた。織田さんは、今回の曲に「社会に飛び立つ学生たちに、がんばれ、どこまでもとんでいけ、というメッセージを込めた」そうである²⁾。よさこい祭りの中では、直接、「しょうもない曲は作りたくなかったから」とのお言葉も聴かせて頂いた。

このようにして生まれた今回のよさこいには魂がこもっていた。練習の特訓で、どんなにヘトヘトになっても、曲のイントロを聴くと元気が出て、また練習することができた。

素晴らしき哲学・振付・音楽に巡り合えた幸運と幸せに、心から感謝したい。

7. よさこいデビュー

いよいよ、よさこいデビューの日が来た。最初は、土佐山田祭りである。工科大チームは、毎年、山田祭りの前に、介護老人保健施設とさやまだファミリアを訪問し、踊りを披露している。私は、そのファミリアチームの一員に抜擢(?)された。

ミリアチームの一員に抜擢(?)された。

「ひょっとして、数年後は自分もお世話になっているかも?」「若者に交じって、初老のオジンが踊るのを見たら、入居者の方々は、何か変に思うかもしれないな?」と思いつつ、デビューの舞台上で懸命に踊った。

お婆ちゃん、お爺ちゃんは、自分のお孫さんに会えたような気持ちになられたのだと思う。本当に嬉しそうであった。お婆ちゃん、お爺ちゃんには、工科大の若者の優しさが染み入っていた。踊った後の握手会では、何人の方々から「みんな、本当に可愛いね～」とのお声があちこちから上がっていた。

「初老」の私も、勇気を出して、出来るだけ多くの入居者の方々と握手させて頂いた。入居者の方は、ご家族の方は勿論であるが、見知らぬ方からも話しかけられたら、嬉しいと感じられるに違いないと思ったからである。果たして、私の手を握って離さない方もいらっちゃった。入居者の方々のご健康とご多幸を祈りながら、ファミリアを後にさせて頂いた。

8. メダルラッシュの幸運

土佐山田祭りのフィナーレは、鏡野中学校グラウンド中央ステージでの踊りである。

そこには、なんと審査員席の中央に我が工科大の浜さん(浜田理事)がデ～んと座っているではないか。私に気付くなり、手を顔の前で横に振って「渡邊さん、無理でしょう。ダメダメ」とハナから期待度ゼロの表情をされているのである。私はこれに発奮した。「日頃の練習の成果を今こそ発揮しなければ。ゴルフでは全く敵わないが、よさこいでは絶対に負けられん!」との強い気持ちを持って踊りに臨んだ。

そんな私の気負いとは関係なく、浜さんは踊りの途中で席を立ち、はるかに上手い若者の踊り子を通り過ぎて私に歩み寄り、「ハイ、あなたが一番下手でしょう(賞)」と笑いながら、メダルを首にかけて下さったのである!その後、「中年の星、いや初老の星か!」と言って私を絶えず気遣い励まして下さった。踊り子のご経験もある浜さんは、中年、初老のオジンにとって、練習、そして本番で踊ることが、どんなに挑戦的なことであるかを実感されていた。浜さんの優しさを改めて実感した瞬間であった。

よさこい祭では、本祭初日に上町のメダルと追手筋の花メダルを、全国大会で追手筋の個人メダルの合計3個を頂いた。

初めて上町でメダルを頂いた時の感動、夜の追手筋でまぶしいスポットライトを浴びながら花メダルを頂いた時の高揚感、早々と鳴子を落としてしまいがながらも全力でフィニッシュを決めた瞬間全国大会のメダルを頂いたときの達成感—私の一生の宝物になった。

審査員の方々は、キレイく踊っている若者に交じて、白髪の「笑顔要員」が一生懸命に手足を動かしている姿を見て、けなげに思っただけで賞を下さったのだと思う。これも工科大チームみんなのおかげである。

土佐山田祭りもよさこい祭りも、祭りを準備するに際しては、大変なご苦労があると伺った。各会場で踊らせて頂く前には、この場に立つことができる幸せと幸運に感謝し、過去から現在まで祭りを準備し実施して下さっている各商店街や地域の方々に感謝し祈らせて頂いた。下手くそな自分の踊りではありますが、どうか自分の思いが地域の方々に届きますようにと思い祈りながら、懸命に踊らせて頂いた。今回怪我をすることなく全ての行程を踊りきることができたのは、地域や商店街の方々からも温かく絶大なるご支援と応援を頂いたからであると信じている。

また、猛暑の中、公衆トイレの手洗いの水にも大変お世話になった。世界広しと言えども、この水をゴクゴク飲むことができるのは日本くらいのものであると思う。昔、上水道工学をほんの少し勉強した者として、安全・安心なお水をここまで普及・維持して下さっている水道関係者の皆さまを改めて偉大であると感じた。

余談になるが、よさこい祭りの一週間後、韓国ソウル市で開催された第6回アジア水資源学会で、物部川の人々等との共著で、物部川の環境保全活動のマネジメントについて発表させて頂く機会があった。冒頭、「こんなに声が枯れてお聞き苦しく申し訳ありません。実は1週間前、よさこい祭りに参加して全力で踊っていたものですから」と始めた発表では、優秀発表賞を頂いた。ここでも、よさこい関係者の方々が応援して下さっていることを感ぜずにはいられなかった。

9. 土佐山田祭りと高知よさこい祭りの魅力

北海道出身の私にとって、以前は、高知の歩道も車道も狭いように感じる事が少なくなかった。しかし現在は、そして、よさこいを踊ってからは一層、この狭い道に愛着を感じるようになった。これらの道には、過去から現在まで、多くの方々の思いがどっさり詰まっているように思う。

観客の中には、障がいを持っていると思われる方もいらっしゃった。その中で、娘さんに付き添われながら車いすに座って踊りを見に来られたお婆さまがいた。お婆さまは、もしかしたら認知症であろうか、状況をはっきりと把握されていないように思われた。

このとき私は、父親のことを思い出していた。父親は認知症であったが、最後は私が誰なのかさえ認識することが出来なくなっていた。そのような中、父親が昔好きだった歌を耳元で歌ったことがある。終わった後、父親は涙を流していた。

言葉は上手く喋ることが出来ないかもしれない、意識もはっきりされていないかもしれない。でも、昔、大好きなよさこいを感じたら、私の父親のように、ご自身が今も「生き活きと生きている」ことを実感されるかもしれない。そう願い祈っていると、思わず、その方々に身体を向けて踊っている自分がいた。その時、付き添いの娘さん（私と同年代位かもしれない）が、「お婆ちゃん、見て見て、踊り子さんがお婆ちゃんの方を向いて踊っているよ。」と仰ってくれていたように思った。

踊り子が本家・高知のよさこい祭りに感じる魅力は「観客との近さ」「街全体で開催している」との調査結果がある³⁾。私は、土佐山田祭りと高知よさこい祭りの魅力は、踊り子のことを深く愛して準備・実施して下さる地域・商店街の方々と、そのご苦労・思いに懸命に応えようとする踊り子チームとの熱く、温かいキャッチボールにあるように感じた。観客の中には、外国人の方々もいらした。私は「Where are you from? Are you having a fun? This is a wonderful festival, isn't it!!!」という熱い思いを、精一杯、アイコンタクトと踊りで伝えようと試みた。この温かいキャッチボールの素晴らしさ、心地よさを、世界の人々に知って欲しいと心から思った。

よさこい祭りの翌々日、お世話になった方に挨拶をした後、帯屋町商店街を何回も歩いた。よさこい祭りとは違い、静かな暑い夏の日であった。「ああ、ここではこんなことがあった。ここは、最初は苦しかったな。でも楽しかった。」など少年のように感傷に浸りながら歩いた。今までの商店街への思いとは全く違う、懐かしい、故郷を思う気持ちに包まれた瞬間であった。

10. 工科大の方々からの応援

工科大学生、教職員の方々からも多くのご声援・ご支援を頂いた。

今回踊らせて頂いて、工科大のよさこいOB・OG

チームが鉄の結束を誇っていることを知った。事務局の伊勢さん、岡花さん、服部さん、井村さんの「よさこいイズム」とも言うべき信念が、伝統となり、後輩に受け継がれていることを実感した。とても頼もしいと思った。

学生支援部の皆さまに関しては、今回もまた、学生を思って献身的に尽くしている姿を目の当たりにした。とても有り難いと思った。個人的には、健康管理室の田内先生からは、「私が倒れないように」と万全のケア・ご配慮を頂いた。楠瀬さんからは、初日2つ目の万々商店街での第一クルーの踊りが終わった後、「わたなべせんせい！」と大きな声援を頂いたことが忘れられない。あの声援で、緊張がほぐれ、祭りに入っていくことが出来た。健康相談室の池先生には、学生との数多くの写真を撮って頂いた。

多くの教職員の方々が、よさこい踊り子隊に熱いご声援を送って下さった。改めて感謝申し上げます。

もう一つ、印象的な出来事があった。

帯屋町商店街で踊っているとき、見覚えのある麗しきご婦人が、微笑みながらこちらをご覧になっている。その隣には、ダンディで真剣なまなざしで声援を送って下さっている、ただし鏡野ホールで良くおみかけしている男性がいた。佐久間先生ご夫妻であった。

先生は、「ナンデキミハココデオドッテイルノカ」と仰っていたように感じた。(全く違っているかもしれませんが、その時は、申し訳ありません。)私は、「ワタクシモ、ケンメイニオドッテイマス！」と踊りで精一杯表現することを試みた。

後で何うと、佐久間先生は、毎日よさこい祭りに来て応援して下さいっていたそうである。

学生と教職員との一体感—工科大学のかけがえない魅力であることを再認識した。

11. その後

今回のテーマのとぶうおは、苦しみながらも仲間を懸命に探し続けている物部川のアユにも重なる。工科大チームには、2014年11月30日に工科大学講堂で開催された第二回物部川を考えるシンポジウム「つながちゅうがよ！物部川」で踊って頂いた。私もその一員として、躍らせて頂いた。約10名の精鋭メンバーの中で、私の踊りは大変目立っていたと思う(笑)。私の思いを快諾してくれた工科大チームの仲間の優しさに改めて触れ、熱い夏の感動を思い出すことが出来て、とても嬉しく思った。

11月初旬に、マネジメント学部の国際プログラ



図2. 物部川を考えるシンポジウムでの踊り(撮影：竹内和人氏)

ムの協力関係を進めるために、ミズーリ大学セントルイス校に伺わせて頂いた。その間、夜の懇親会で、よさこい踊りのリクエストがあった。日米文化交流のため、意を決して、鳴子を「指鳴らし」(finger snapping)に換えて、踊りの一部を披露した。踊りが未熟すぎて、残念ながら拍手喝采という訳には行かなかったが(笑)、この素晴らしきよさこいを世界の多くの人々に知って欲しいと改めて思った。

12. さいごに

今回、よさこいを踊って、改めて、或いは、初めて、気が付いたことが数多くあった。

- 学生のみんが、忙しい中、時間とお金をやりくりして、懸命に生きていること
- 工科大生は、本当に、温かく優しい気持ちの持ち主であること
- 教職員も学生と大学の幸せを願って尽くしていること
- 土佐山田祭り・高知のよさこい祭りの魅力とは、地域・商店街と踊り子チームとの、熱く温かいキャッチボールにあること

よさこい祭りもまた、工科大学の大切な理念の一つであると考えられる「世界一、人が育つ大学」の方針を具現化するひとつであると考えられる。自分に来ることは限られているが、学生のみなどと、教職員の方々と、そして地域・商店街の方々と共に歩いていきたいと心から思う次第である。

今年も新曲に乗ってさわやかな鳴子の音が聞こえてきた。新しいリードのみんが、厳しいトレーニングに励んでくれていることを感じる。今年のよさこいも、祭りに関わる方々が、それぞれ生き活きと

生きていることを実感出来る熱い祭りとなることを心から願い祈りたい。

素晴らしい時間を過ごさせて頂きました皆さまに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

謝辞

本稿をまとめるに際しても、多くの方々から貴重なご助言を賜りました。厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

文献

- 1) 大越健介,“スポーツ随想.”高知新聞,2013年9月26日夕刊.
- 2) “織田哲郎さんよさこい共演.”朝日新聞,2013年8月8日朝刊.
- 3) “踊り子感じる本家の魅力『観客との近さ』8割超.”高知新聞,2013年8月9日朝刊.

My First Yosakoi

Tsunemi Watanabe*

(Received: June 1st, 2014)

School of management, Kochi University of Technology
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782–8502, JAPAN

* E-mail: watanabe.tsunemi@kochi-tech.ac.jp

Abstract: I first participated and danced in Tosayamada-festival and Yosakoi dancing festival in 2013. I would like to share my unforgettable experience and memory with readers. One of the education principles of the KUT is to aim at “the University where students can grow most soundly in the world.” The way the KUT students and staff participated in Yosakoi dancing festival is along with this principle.